

## 2021年冬鳥ウォッチの報告

バードリサーチ 山崎優佑・平野敏明

2021年度の冬（以下21年冬）は、日本海側を中心に記録的な大雪となり、また、関東以南の平均気温は例年よりも低かったようです[1]。実際に今年の冬は例年よりも少し寒かった印象があります。このように積雪量が多いことや気温が低いことは冬鳥の分布に影響を及ぼしたかもしれません。関東地方だと12月までは市街地の公園などでツグミを目撃することが中々できませんでした。では、冬鳥ウォッチで対象としている6種はどうだったのでしょうか。以下に21年冬の記録状況を報告します。

### 調査地及び記録状況

21年冬は、北海道から九州までの72名より合計105か所の調査地で各種の合計188件の情報が寄せられました(図1)。調査地数や情報件数は20年冬と比べるとやや減少したようにも見えますが、この時期はインターネットバードソンを開催し、例年は冬鳥ウォッチにデータ入力をされている方が野鳥データベースに入力されているケースもありました。おそらく実質的には20年冬と同じくらいの人数の方が協力してくださったのではないかと思います。



図1. 冬鳥ウォッチの調査地数および情報件数の推移

情報件数を地域別で見ると、関東地方が最も多く、情報の半数以上を占めていました。関東以外では中部地方、中国地方、近畿地方の順で多く得られました(図2)。

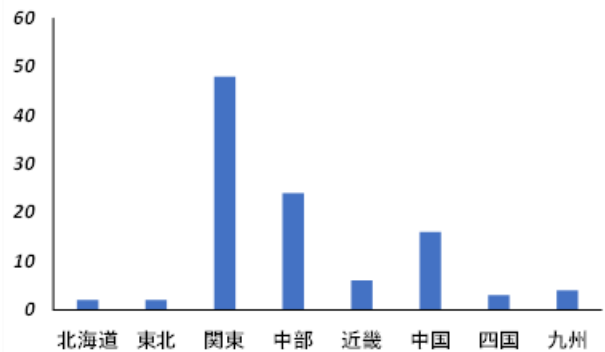


図2. 地域ごとの調査地件数

### 21年冬の冬鳥の傾向

21年冬の冬鳥6種の越冬状況を解析するにあたっては、冬鳥ウォッチの情報だけでなく、野鳥データベース「フィールドノート」に寄せられた12~2月の情報も含めて分析しました。

まず、記録数が例年少ないイスカとハギマシコは、どちらも20年冬には比較的多くの場所で目撃されていました。しかし、21年冬では東北および中部地方でわずかにイスカが5件とハギマシコが2件だけでした。ハギマシコは北海道で越冬しますが、21年冬は情報がありませんでした。

次に情報件数が多いカシラダカ、アトリ、カラヒワ、マヒワの4種についてです。

21年冬のカシラダカとアトリの情報件数はそれぞれ397件と210件で20年冬と比べるとやや少ないものの、19年冬よりは多く得られました(図3)。ただし、アトリは例年だどこかの地域で500羽を超える大きな群れが記録されていますが、21

年冬にはそのような大きな群れの情報は得られませんでした。さらに、参加者の方からは春の渡りの時期についても小群しか確認されていないという情報もいただきました。これらのことからアトリは、21年冬では全国各地で小規模の群れで越冬していたのかもしれませんが、数百羽以上のやや大きな群れがよく見られる新潟県や福井県、九州地方のうち、日本海側の地域では21年冬は大雪でしたので、大きな群れで越冬するには餌が少なかったのかもしれません。

次に、カワラヒワは過去3年間の中では21年冬が最も多くの目撃情報が得られました(図3)。また51~100羽の中規模の群れが過去2年は27件だったのに対し21年冬は46件報告されています。一方ある地域では21年冬は個体数が少なかったという情報も得られています。餌が豊富にある場所があって、そこに集まってきていたのかもしれません。

一方21年冬のマヒワの情報件数は79件で過去3年の中では顕著に少なかったです(図3)。地域的な偏りがないか20年冬と比較してみました。全国的に目撃情報が少ないことがわかりました(図4)。マヒワは樹上で採餌をすることが多いですが、渡りや越冬の時期は地上でも採餌をすることがあります[2]日本海側での情報件数が少ないのはもしかしたら大雪が関係あるのかもしれませんが。しかし、太平洋側はこれだけでは説明できないように思われます。19年冬より前の時期と比較すると21年冬は特別情報が少ないというわけではなくむしろ19年冬と20年冬は、特に多くの目撃情報が寄せられています。この2年は日本での越冬個体数が多かった年だったのかもしれません。来年以降の越冬状況も引き続き注目していきたいと考えています。

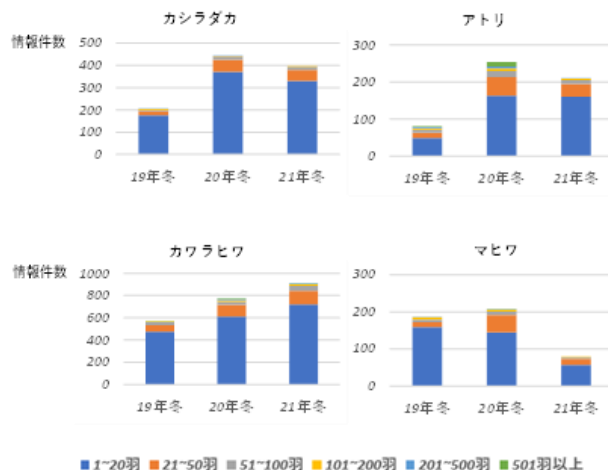


図3. カシラダカ、アトリ、カワラヒワ、マヒワの19年冬、20年冬、21年冬の情報件数。

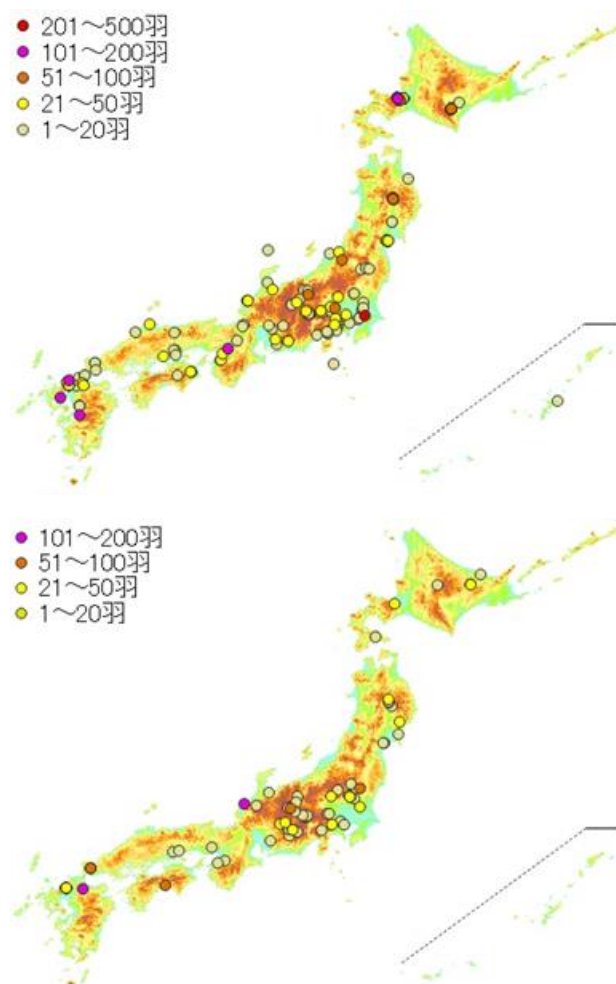


図4. マヒワの越冬分布図。上が20年冬、下が21年冬。

## アトリの越冬個体数はどこでも変動が大きいのか？

アトリの越冬個体数は関東地方の市街地や農耕地などでは年によって変動し、数千羽規模の群れが観察される年もあれば、全く観察されない年や観察されても小さい群れで越冬している年もあります。このような傾向は全国各地でも見られるのか、10年冬以降に冬鳥ウォッチと野鳥データベースに提供されたデータで、個体数が100羽以上だったデータを取り出して群れの記録状況を調べました。

その結果、関東だけでなく東北、近畿、中国、四国などでも100羽以上の群れが記録される年とそうでない年があることが分かりました(図5)。これらの事から、多くの場所で越冬個体数が年によって変動することがわかりました。

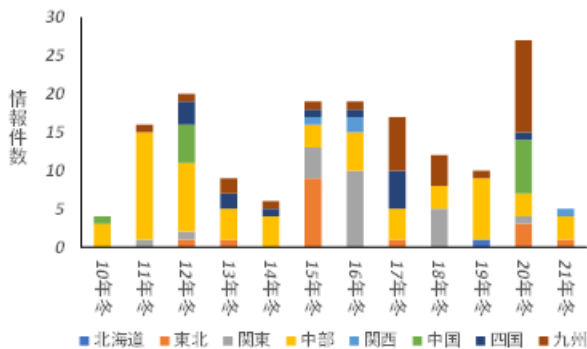


図5. 10年冬～21年冬の地域ごとの100羽以上の群れの見撃情報の件数。

このように年によって群れサイズが大きく変化するのは、主に以下の3つが関係しているのではないかと考えられます。

- ①繁殖地での繁殖成績
- ②周辺国の越冬地の環境
- ③国内の越冬地の餌資源の量

アトリはアジア周辺ではロシアで繁殖し日本や中国、朝鮮半島、台湾などで越冬しています[2]。

- ①についてロシアでの繁殖成績は越冬個体数を大きく左右すると考えられます。
- ②について国内で越冬しているアトリがどのよう

なルートをとって日本に飛来しているのかまだ分かっていませんが、日本海側の地域で11月にアトリと思われる小鳥の群れを観察したという情報が寄せられたこともあります。もし大陸を経由して日本海を越えて渡ってきているのであれば、大陸の越冬地の餌が不作だった年や積雪量が多い年などにたくさん日本に飛来していると考えられます。

③について餌資源の量が多い年は、それに応じて越冬個体数が増加した事が過去にありました。関東地方や東北地方では、15年冬だけ数万羽のアトリの群れが観測されています。この年は9月に大型の台風が上陸したことによって、この地域の刈取り前のイネが水没し、収穫されませんでした。そのため、食物を大量に獲得できるため、アトリが集まってきていたのではないかと考えられます。このように餌資源が偶然多くなるとアトリは大きな群れで冬を過ごすようになるのかもしれませんが、尚、中部地方では毎年100羽以上の群れが目撃されています。九州地方は、10年冬と21年冬を除き、毎年目撃されました。しかし10年冬は3月に観察したという情報があるので、この年も越冬していたと考えられます。これらの地域では、毎年餌資源が豊富で同じ個体群が越冬地として利用しているのかもしれませんが、ただ、21年冬は九州で100羽以上の群れが目撃されていません。採餌場所などで何か変化が生じたのかもしれませんが、今後も引き続き注視していきたいと思えます。

## 最後に

21年冬は日本海側で大雪があり、これはアトリやマヒワの越冬分布に影響を与えたことが示唆されます。また、これまで調査していた場所にソーラーパネルが設置されたといった話も聞きます。このような気候変動や人間の活動が鳥類の越冬にどのような影響を与えてしまっているのか分析していくためにも、引き続き調査を行っていく必要があります。そうした中、有難いことに以前と比

べて調査に協力してくださる方は増えてきております。また、個体数に関する情報だけでなく、備考欄に調査地の状況や他の種の越冬状況なども記入してくださる方も多く、分析をするときとても役立っております。来年以降もまた是非ご協力頂きますよう宜しくお願い致します。末尾ながら、調査に参加して頂きました皆さまのご芳名を記してお礼に替えさせていただきます。また、今回分析を進めるにあたって野鳥データベースに収集されたデータも利用させていただきました。日頃より野鳥データベースに情報を提供して頂いている皆様にも深く感謝申し上げます。

井手大幹, 井上幹男, 井上賢三郎, 一倉行雄, 越川重治, 園村茂夫, 延江勝彦, 猿子正彦, 押田正雄, 横佐古智紀, 岡かおる, 岡美代子, 加藤美奈子, 巻幡幸成, 金子凱彦, 穴口裕司, 権田茂, 戸野村茂明, 五十嵐勉, 笹野聡美, 三宅茂子, 鹿間信弘, 宗崎眞弓, 秋山幸也, 渋江奈緒美, 小松周一, 小池順子, 小林俊子, 松丸拓哉, 上出貴士, 森佳子, 須田由美, 菅原美奈子, 清水敏弘, 西教生, 齊藤充, 石原浩一郎, 石崎友紀子, 石塚文信, 千島康幸, 多田英行, 大村洋一, 大内晴, 滝澤三郎, 長谷川和正, 長嶋宏之, 田村久美子, 田中正晴, 渡部通, 渡辺美郎, 渡辺明美, 藤井聖三, 藤江昌代, 藤田裕子, 藤田和彦, 徳田英雄, 二村一男, 白石ひとみ, 幡俊雄, 武居佳子, 武市絵美, 武廣一輝, 蜂谷栄朗, 北村吉朗, 妹尾映児, 務台明, 木村雅世, 矢野弘美, 鈴木ゆう, 鈴木由清, 高橋邦年の各氏。

## 参考文献

[1] 気象予報士 日直主任 2022年3月15日 2022年の冬 日本海側を中心に大雪 東日本・西日本で低温 ラニーニャ現象が関係(最終閲覧日:2022年5月1日)

<https://tenki.jp/forecaster/deskpart/2022/03/15/16506.html>

[2] Birds of the World - Cornell Lab of

Ornithology(最終閲覧日:2022年5月2日)

<https://birdsoftheworld.org/bow/home>